search fellow として国務省の文書はもとより，きわめて文献の広範な参照に基づいてまとめたのが本書である。著者は，現在 Christian Science Monitor の刊行で有名な Christian Science Publishing Society の理事会会長を勤めている。

かれはまる4年ぶりにインドネシアを訪問した。ジャカルタでの昼食会に私は同席したが，彼はもっぱら聞き手にまわっていた。おそらく彼の離任後のスハルト政権下のインドネシアを知りたかった訳であり，この旅行は本書第4部の Back from the Blink の資料にもなったであろう。その時あまりスカルノ時代のことを話したがらなかったが，彼がスカルノ後半期のインドネシアを最もよく知っている人物だけに，私にはいささか物足りなく思われた。

ところが，この物足りなさは今度の本で充たされた。それどころか彼から見た，特にスマトラ反乱，西イリアン問題，マレーシア対決のインドネシア共産党の勢力増大などの体験から見たこの期間のインドネシアの政治，外交の動きが手に取るように伺われる。さらに，スカルノ大統領の行動や性格，特に決意までの過程がきわめて興味深くヴィヴィッドに描き出されている。

もっとも，1965年9月30日のクーデターについては，彼の離任後に起こったことであるだけに本書では GESTAPU と題して一章がさかれているにすぎない。クーデターの指導者，大統領官邸の護衛将校 Untang 中佐が，このクーデターは「CIA がスポンサーをしている破壊運動である将軍会議が10月5日にクーデターを起こそうと計画していた。自分のクーデターはこの陰謀に対する予防的措置である。」と声明したことを本文で引用している (pp. 374-375)。この CIA 陰謀説に対しては，脚注で一行だけ，"This was pure fabrication. The CIA was a convenient scapegoat". とかたづけている。この点もっと詳しい説明が欲しかった。

これだけの大部の回想録をシステマティックに，しかも興味深く読めるよう書きあげたことはたいしたものである。しかも，これは回想録というよりも，自分の体験を通してのインドネシア現代史であり，インドネシア観でもある。出来るだけ主観に陥らないように多くの文献資料によって裏づけしたのはまことに見事の一言につきる。

もっとも，著者としては書きにくいことがいろいろとあったのではないかと思われる。インドネシア問題を取り扱う時の難しさがこの著書の場合はその地位ゆえに特に深刻であったであろう。筆を慎んでいるとの印象がところどころ見受けられる。

インドネシア現代史，特にスカルノ政権後半期については，最も貴重な文献のひとつであろう。これだけの仕事を果たされた著者に対し，心からの敬意を表したい。

（本岡　武・東南ア研）

飯島　茂『カレン族の社会・文化変容—タイ国における国民形成の底辺—』東南アジア研究双書5，創文社，1972，315 pp.

同一社会内の民族的多様性と相互間の共存・拮抗，同化・統合の過程は社会学的・人類学的にきわめて興味深い重要な研究であるが，ことに発展途上国においては，それが国民社会の安定性に与える影響が大きく，また直接的であるために，それだけ実際的な問題として重要な意義をもっている。

タイ国の場合，このような民族問題は今日のところ顕在化していないが，潜在的に存在するのであって，早急に解決されねばならぬ重大な課題を構成するものとして意識されている。しかしながら，従来，少数民族に関する信頼度の高い資料に基礎をおく，包括的で，集約的な報告書は皆無であるといってよい。本書はタイ国北部山地に居住するカレン族を取り上げ，著者自身による定着的な人類学的野外調査（1964～1966）の成果に基づいて，少数民族の問題点を国民形成の立場から解明した画期的なモノグラフである。

言語体系を異にするばかりでなく，その体系的知識を欠く部族民の調査は，よほどの経験がなければ，資料収集さえ困難であろう。著者はそうした不利な状況を克服するとともに，技術的には地域的・時系的変異を功みに利用しながら，カレン族社会の歴史

的変化を鮮かに描写している。しかも，著者は人類学のみならず，農業経済学，地理学，社会学にも造詣が深く，この歴史的変化の過程を「部族民社会」から「農民社会」への同化の過程，もしくは「山地民」の「平地民化」(plain emulation) の過程として分析している。この場合，既存の理論を当てはめて事実を解釈したり，組織づけたりするよりも，むしろ著者自身の経験的事実のなかから比較可能な理論的枠組を構築しようと努力しており，そういう意味で，実証的性格に富むとともに，きわめて野心的な書でもある。こうした専門的分析の後に得られた底辺の理解を通じて，少数民族の諸問題が具体的に考察される。本書の作成にあたっては，著者自身によるヒマラヤ山地民の調査と分析の経験と実績が大いに役立っているものと推察される。

以下，要約を試みるならば，第1章で山地民カレン族の概観を記した後，第2章～第5章において，平地民化の過程が分析される。すなわち，カレン族の村落構造は焼畑耕作に支えられる，移動的，血縁的なロング・ハウスに原型が求められるが，水田耕作が導入され，他方，焼畑禁止令によって七圃農業への転換が余儀なくされることによって，定着的，地縁的な村落が形成される。水田耕作は土地所有の観念に変化を与え，総有制から個人所有に移行し，かつての血縁的な共同組織としての村は崩壊しはじめる。貨幣経済の浸透や現金収入としての水牛飼育はこうした傾向に拍車をかける。そして個人主義化と親族組織の弱体化が進行するとともに，宗教面では世俗化が起こり，母系的な社会集団に関連する Oxe の儀礼は組織と信仰の両面において簡略化されたり，chakasi 運動によって廃止されたりして，カレン族固有の宗教は弱められるが，これらの現象は仏教の普及と深い関連をもつことが明らかにされる。しかし，他方，復帰運動的な現象も同時に見出され，たとえば，talutaphadu 儀礼が一例として挙げられるが，これは村神的な性格が強く，カレン族の村落社会が地縁集団として再編成される段階に出現するものである。こうした変容過程を分析するにあたっては，山地カレンと平地カレンがたえず比較され，国民形成ないしタイ人社会への同化として把握されているところに特異性がある。第6章と第7章では，政府による教育，宗教，言語の普及活動に対するカレン族の反応が分析されており，山地民対策に対する批判と提言が随所に見出される。最後に結語として，平地民化に関して理論的考察が試みられている。変動過程の分析に際しては，客観的条件のみでは不十分であり，主体的条件の重要性を力説しているあたり，しごくもっともとはいえ，いざ分析となれば見落とされやすいものである。なお，付録として末尾に付け加えられている「カレン族小史」と「焼畑農業」も，この種の研究者に貴重な資料を提供している。

本書は含蓄の深いモノグラフであるので，簡単な要約はかえって内容を無味乾燥なものにしてしまう。なによりも一読をお勧めする次第である。

山地民といえば，一国の経済発展からほど遠い問題であるかのように考えられがちであるが，すでに触れたごとく，政府が現に悩んでいる問題であることには間違いない。この機会に，著者と共に，発展途上国の少数民族の問題に目を向けることが望まれる。

（水野浩一・東南ア研）

Ronald Provencher. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971. xii+211 pp.

本書はカリフォルニア大学南・東南アジア研究センターの Research Monograph No. 4 として，仮綴の体裁で出版されている。著者のねらいは，同じ伝統文化をもちながら，都市の集落と農村の集落とで社会環境がいかに異なり，またこの異なった社会環境が人々の社会的行為にいかなる差異を生ぜしめているかを，西海岸のマレー人社会に関して明らかにすることである。

この報告の基礎となった現地調査は，1964年9月から1965年12月にかけて行なわれた。調査地は，都市的な集落としてクアラルンプール市内の Kam-